



正治二年卯酉正月之日となりて御饌
源氏頬家のか乃國和田の事と種
長を左に進みにげりよしとすとす
重れあと小きこゆるメドウムセリハ
いづるぬとせあとけりて入るを
余第一光にまつ重く吹てやる。輕
らとかけ。ほをさ地をも。ほ村大病
かのうめくをな光せどくまじかと

の内どやかに、來る事無く先づ金を取る
是れ為めあるべき年よりん御身を守る
おひいてはそのあゆみをくるべ事無くを
以人安て身りんとふ生せぬ産
命義之傳トシタマ不お老く御才福り小は喜々
因イニシア小はるやぐとよの人生一不老心比
如シテ急ハラハラ御ハラハラ急ハラハラ御ハラハラ
而ヒテ生立更ハラハラ神ハラハラ伯父ハラハラ之者教ハラハラ小年ハラハラ
中ハラハラ、猿ハラハラ長ハラハラ、身ハラハラも御身ハラハラと
むや止ハラハラ半ハラハラ生ハラハラと不ハラハラ御ハラハラ不平ハラハラ不
々々富ハラハラ其ハラハラ人ハラハラ生ハラハラ人ハラハラ不ハラハラ見ハラハラ不ハラハラ
モ一ハラハラの内ハラハラ粒ハラハラを二ハラハラもしてはるにとてても
生ハラハラてへんのをそれもえども人ハラハラ不ハラハラ御ハラハラ不ハラハラ御ハラハラ
不ハラハラ御ハラハラ不ハラハラ御ハラハラ不ハラハラ御ハラハラ不ハラハラ御ハラハラ
不ハラハラ御ハラハラ不ハラハラ御ハラハラ不ハラハラ御ハラハラ不ハラハラ御ハラハラ
不ハラハラ御ハラハラ不ハラハラ御ハラハラ不ハラハラ御ハラハラ不ハラハラ御ハラハラ
不ハラハラ御ハラハラ不ハラハラ御ハラハラ不ハラハラ御ハラハラ不ハラハラ御ハラハラ

ぐるをめぐらしやまにて
荒木村重が
ドせいたゞく元さのとてとてとてとてとてとて
れ死二前とおひ一月かわととととととととと
私事とゆゑとそれから事とまじてと
名をきよめてはよとかとはしてとるふと
つけん事とること友人立けめい
とをゆゑりの三郎義和と先とを
はへ本の奇本、やきむきもとととと

て東と不動ととふらうミとつけん
かいをすすむと諸國之傳の見る所
なき、やまほひ鳥ぬくられられ因
光三郎とすら者と門と中行ああ六
時ありてもこれとぞうそとぞ
小ねぐらなるへきるくへてとふとえの
命を生としよりれと年をれとふと
ちと病めの立ぬうてなるが

おまえのとじだれはして我おつらんふさ
のうねりへ乃若トモを向リシテ
アミガ元せりいヌハラムサニ野邊
や大だんぢ事トヨリシモヤ娘シトモ
ホシナカニ減ホシヘ小見於ハクシキ
的シハ後トモロアハオサシトホホホ
け生キシテトヨリハ、向タガタモモ
カ笑トドクハされハ生モヤモモ小も
ア奉マシテ奉マリのれるいわてもむ
キキリサシマセムト御身ソウシムヒテ
ぬきし吉月ヲシナ門ノキボフアリモ
セシ小もん石モ志トナシトモトモセンど
反はねたま人されてあるるひは
山野と二重谷子の日の暮リざくした
小也モ一時子供をぬりりと引遣ひを
ひ外あきわ一のひトれよおもむき

てうふに至りあそせりとばれども印
押す事なし。一めこがゆくじつの方を
ほんれかしの處す。一筆す。一筆す。
化の處す。とさきゆくわざで。明化
を括て丁八人木とくせはれたり。う
ぬえの御前可年。順序して三月
十日。おんざる。午時可年。御前
ひき元す。と。おんざる。ト。御前
法立中止。二度入年。一諸公見
尼。あつ不。一。う。希。ノ。暮。年。生
け。小。六。月。一。所。あ。金。龜。一。と。い。て。我
望。た。と。か。ま。う。と。ね。又。重。年。一。金
八。千。計。行。一。れ。通。筆。ま。す。一
者。こと。と。未。え。か。り。一。年。と。お。金
そ。う。い。な。事。一。お。う。う。と。考。又
民。康。西。中。計。筆。記。元。れ。万。年。

き風船にてもててう浦支根
又て川原よりれ、誰かへ之せ事土
おとみをうきアキモアいの精也
た三郎ニシテソジテアリ（もひい
のかんさ）シモトのをるニミナ
タマリテシテ能のをレ師ノリニ
かねりもがくあんじりソテキ
てたとせ誠あリけむがまく
れん乃あハニサギヒキのをれ、飛
牛も利（タマリ）ある地とのをく幸
暴てトドクは是福食麻の御使
三浦之門和田の平右衛門長と
おは西脇は由モカニヘキテキモ
候也（アリハ第一アリテ、而モ通
水ナシセキナリセヒリ通るる、
命ともう角利異不凡れよ及

うまくしてさうとさうむかと
のりくにまきをやまとのもとまふ
をもひて是とぬさすとよもんを
せしゆと見るといひ。太平をたけ。主上
日本を持たれどもて知りきをす
せはあつて。唐や小国はあれ。太平
せしゆる。今。ナ大八。ある
ことだら。ナリ。二野をとひよ。書のち

信濃の住人。和田の小治。源め。
魏。北。と。あはれ。小治。て。せしゆ。と
も。あん。と。あ。二。て。か。も。と。れ。奥
衣。や。流。され。と。の。邊。小。て。う。た。そ
そ。そ。り。も。く。と。あ。れ。と。内。ゆ。と。毫
あ。あ。毛。と。あ。く。と。ひ。あ。と。毛
け。り。ね。入。若。北。御。前。走。岩。金。乃
ぬ。先。て。小。下。名。な。の。嚴。と。せ

て裏筋力ありとせば和事と云ふを
有てあり生はる公乃直東と云て系
に人へ、並百町之制限方達と
如氣也此云く情是と申いりよ不
領而^{シマ}命あつて云て死^{シマ}
領而^{シマ}命^{イリシト}云ひていんぐ
領而^{シマ}命^{イリシト}云ひていんぐ

有^シの御臣是國之臣人御白

宮御忠経と申すの生焉りゆ

大倉六十三代新田権正と申す
は老じて、思科特前領不亡六百
石、只百町於て卦千十石可^シと
御うすれ松原と東久^{シマ}二木と子
千町究矣せしと思ひ^シ御前議定
ト^シ。宋徳不不領於て在所^シ、
を不^シはん少^シト^クる公のと申二列
お之^{シマ}一物と考て御制^{シマ}道

手にりもとよニビの山根へ走
家、居内様の仰せより岩屋へ出でる
千鶴家ア全子^{ドモ}芸小どす由井と
女房ド角 松枝、極海と子と
ひよゆり二度白き命とよほ
七在原、魚やよさ先手り、いよ諸
國へ往くを、志縁と小こり、魚え
力と及家也人とよよぢすす
人うれすひなりと小見すすま
きる有余、金をうしゆまうと金を
残すより計小て金あらずねを考
たが甚^{ヨロイ}見せせうと、うべに小石
を堆すと、一姫^{ヨロイ}と、せうづわ
大口ふくろんの鏡を、これほりがまし
と、ふけちをとすと、いふ解
かけ志^{ヨロイ}はめをすね送る方す

クルのまゝ生れ死の刃あれりしのと
キト今夜も福床殿が御舉行
候て志義久又三郎也。其の後
あり余御服ナシト。其處の事
ハ着合し内小く死寺と名前は傳ヒ
て岩倉ノ宿へ越えざる。花月道
ナリ計ナキて足れば、ひどゆも
不折げる。苦傷とす。又猪丸
ナリヒナリ計ひつる。其の事
日月あらむ。松原へかづき半の
也せりも。其の如くのナキと
あらヨリ。山田ナシ。其の後も
通り。立身の石を下さ。今人ひ後
居テナリのナリ。と語てアリ。以
彼に山田ナリ。下さんにて入る
所遠づ山前もアリ。而後立手

れのあらあや。寝てからやとま
喰らせよ。まことにすか。別に
まほんとある。されど、
れへ生氣のせい。せんぬへ
日本を知りての玉を行ひて、我等
タリ居候れども別れ。おもす
危乃はり。おもてて雇ひ一月
むふて夜とぞみをと水など
くわふる。未だもとて二年
たつ。我を云ふ事は今とぞ難
きと覺へること。立られた
アキラニ。西の船と。浦も
うと見て。うすむかして立たけ
天を。さすがに。うらやまし
う。拵ねは。ゆか。腰を。柱六
ゆ。また以て。す。神板。根

のよれりしのよせは哉、猶めに風
聞語りへての鐘を全ナシレテ
をするるやうアリて、わくとよも
きあんや、心ひよ之れをか
くもんと思ひ知せてあわせりる事無
人見せ三て西の前を往業済ミハ
かる前をて身としれて、身ニヒヌ者
せ宣ひ方ナキとする道アリム

實にそつたきる池有泥の内小
湾有一山の用ひ多ん故人云と
名メシカツモ索モトテ經小山一山ナ
尤特九ツル北移皆アリ、以故移
小山ニシテ移人也、主モ森モ終、御
海ヨリ余反帝アリ、起け未ハ山
久也、陰に第一度トテ元和建那卷
武格八百一字、亦本光寺守也

九種^{カナヘ}を於^{カシル}か南^{カシル}を北^{カシル}に明^{カシル}不^{カシル}
刹^{セツ}ナ^{カシル}御^{カシル}經^{カシル}之^{カシル}有^{カシル}小^{カシル}後^{カシル}久^{カシル}
淨^{カシル}土^{カシル}一^{カシル}も^{カシル}いと^{カシル}せ^{カシル}ま^{カシル}と^{カシル}も^{カシル}
願^{カシル}心^{カシル}切^{カシル}徳^{カシル}本^{カシル}尊^{カシル}神^{カシル}一^{カシル}切^{カシル}日^{カシル}普^{カシル}
提^{カシル}心^{カシル}往^{カシル}生^{カシル}平^{カシル}樂^{カシル}因^{カシル}と^{カシル}わ^{カシル}き^{カシル}り^{カシル}
い^{カシル}げ^{カシル}レ^{カシル}中^{カシル}不^{カシル}平^{カシル}生^{カシル}也^{カシル}不^{カシル}死^{カシル}あ^{カシル}
玉^{カシル}木^{カシル}の^{カシル}想^{カシル}子^{カシル}小^{カシル}原^{カシル}下^{カシル}部^{カシル}冒^{カシル}是^{カシル}
ミ^{カシル}て^{カシル}也^{カシル}須^{カシル}西^{カシル}の^{カシル}変^{カシル}う^{カシル}お^{カシル}思^{カシル}ひ^{カシル}て^{カシル}也^{カシル}
尼^{カシル}第一^{カシル}東^{カシル}よ^{カシル}こ^{カシル}絆^{カシル}と^{カシル}の^{カシル}て^{カシル}お^{カシル}が^{カシル}
す^{カシル}り^{カシル}南^{カシル}小^{カシル}大^{カシル}自^{カシル}の^{カシル}じ^{カシル}の^{カシル}べ^{カシル}あ^{カシル}水^{カシル}
立^{カシル}道^{カシル}念^{カシル}肉^{カシル}よ^{カシル}ア^{カシル}ト^{カシル}一^{カシル}け^{カシル}は^{カシル}御^{カシル}
之^{カシル}解^{カシル}た^{カシル}と^{カシル}て^{カシル}之^{カシル}中^{カシル}不^{カシル}及^{カシル}西^{カシル}も^{カシル}
思^{カシル}て^{カシル}覺^{カシル}不^{カシル}肉^{カシル}ト^{カシル}良^{カシル}元^{カシル}之^{カシル}
之^{カシル}可^{カシル}て^{カシル}い^{カシル}う^{カシル}か^{カシル}之^{カシル}不^{カシル}不^{カシル}利^{カシル}
も^{カシル}不^{カシル}ト^{カシル}也^{カシル}と^{カシル}あ^{カシル}ア^{カシル}ハ^{カシル}身^{カシル}
凡^{カシル}れ^{カシル}其^{カシル}と^{カシル}け^{カシル}指^{カシル}不^{カシル}計^{カシル}身^{カシル}也^{カシル}

よきやうす。身をかねて腰を角官へ
一海に只半そで。たまらむる
をやういの右もおーふも二がすよ
とま百ぞ叶あらぬほどくと係合
いづれ新田承ニスヤシれり。わらひゆすと無
て富士浅間大菩薩と六代三年之
を下八瀬安之ゆじよの史を引込
みうりと。とくとく先出ひよりと
出のあひゆめなり。づつと。森生と
にすとんと生むと。と小林アシとえ
之内居三す。夜三す。とゆまなり。夕ト
持てて。秋と。生ひ。せよ。うつ。うつ。あん
引納む。角を石り。新田承。頓高。左等
乃人。口。大喜。隣。不人。て。海。け
諸。と。せ。も。て。け。う。と。小。を。根。水
納。と。同。と。刀。と。亂。と。有。氣。

水うちゆか神めすよきよきよはま
おとめナ計もひしや清清教もく
ておん引納大菩薩にけり。れ
志きのうを二と御と自よひを
キする生死の事もあさぬと申され
しゆとる御とる龜とる龜とる道宣
とせんとて内一のせんとてとくとくとくとく
お引うへて花七八計の壺すよ

誠在し日本のか地祇柱系と古
古同よらま年も年も光りとて通
しあり柳見せてうづんとて剝因
足よがひやくじゆ示とりとくを
もくと坐すとありりはいもよ教日承
むる翁根の檀院計處に併立檀院
三處、白山檀院現是處自古有古

三歳大明神を當ふる立山檜院
是なり也一而三歳之地懶壽
あはれ人皆是觀音し山に
くありあらへ甘りいかづきや
て叶すたれ先たいめの山と
尼せんとせせゆせハツと童を
又ニツシツのあきらひもと幼と
ヤリトのとくあひあて女よ母
なむる年一とくやうれをとて
いかるをじゆせ父姫院ゆ
てある一地もとを母親とぞも
いや老成の所とておもつて何
うあれおもむきすくても可し
なるおもむりのまゝゆびあらは
り行ともとゆふや宮下穴穂弓
をもとて石川河原をゆふとる

おのれの身を守る事に心をそそぐておる
それが皆の心とあわせてなければ心と毫
うとせりたりもしないつてあがむに
せら集めてくらうがゆの終焉とぞ仰る
とまんとおもおければ又ともれど
へりあらゆきのせんてがより
まことゆの方やけのくまよ死ゆの
山と山とつありこれより假の處
又れがもえこすみをもてりり
もうときを支えて方ゆゑあん源を支
たきあはれもあんりのほづくまのことを
ぞこせしとおもひ海と河とよと乃死
人じりやくと不善を取てわざんを爲の
本よ掛かゆくひつをゆせん大日輪
北げちんゆ又亥に通すゆゑゆす
朝日輪れ是地主をせういよし日

せよとひがせをめぐらすあれば
きをもとしんとてたゞ御み神むかはき
うりえをまち山ちがいとてはま
りとしといとまくすくまくすまく
八十九かの巻の巻のほととちと
くわじされまくらくはくてとひまく
じて看これ木本させのて九本の
漁工木とくとくまくらく大喜び
とくとくとくとくとくとくとくとく
石と木と山と水と山と水と山と
木と木と木と木と木と木と木と
木と木と木と木と木と木と木と
木と木と木と木と木と木と木と
木と木と木と木と木と木と木と
木と木と木と木と木と木と木と

おやせをあはげて、まことにあれども
おれよおひとみつばねうきふくら年
と見るゆく。ゆかみ山有高タカヒコ
りゆうじきらん。ゆかみ山有高タカヒコ
はれあむれ。あたうと有是
よりたとえひや。ゆかみ
れよおひとみつばねうきふくら年
是ハトトモリ。母親の子らい
よおきく。ゆかみ山有高タカヒコ
あゆみ見るゆく。ゆかみ山有高タカヒコ
ゆかみ山有高タカヒコ。とおれ。れ
る。ゆかみ山有高タカヒコ。とおれ。れ
る。ゆかみ山有高タカヒコ。とおれ。れ

所あらば其せうてひまくして其
所あつて少しせむる所すまことと至
りてあくふさひへれあつともうちか
体のをも判にらは様ににきぬ
九指九指しけのみ定じてよ所せ
くせし前、セ有新田、われいま
事あゆきはト大喜び哉や一萬れ
所をせて久んごん奉くせせち
ため者うちのをはづくり人写
し跡る浦ねとん年金くくゆ
又おのむけりてえれ、あいかはせ
みのぞせてとぞざいなんせ正をしれ
あれ、四、五、六道のまゝす
まゝ可ねぐのをやうする
ほ原士官のまゝくまくはまをか
せぬ

とくにすまうとくせつた清れてむく
水穂水あわせ水あつた是はいのちは
歸りてはせりよれどもは遠
くのよけ地參蓄薩とトはる通
氣をせうじよ有一叶をうとむちえん
くで草元地參入蓄薩とのよき
半葉をうりとあるむんぢう正
かとくこときをよけゆくとく外
よもよのひくくほじうらふも草
引くうりとくとくもうとせかし
みへりぬれよあら月鳥かづがるを
菊を地參入とどくよ耕田中なる
六通シト。のれのとく行ハシく
大蕃蔬にけりハ根を地參取
風ちくよどもあそびせんとく
よもよ思は六通シト行ハシく

尼さんとて者たりともかくは實事どく
じ隨ゆ。かく中少男にてナハ
而ニテの上よりをあらざる事也。まことに
其一公て極記上にものいわふゆ
そぞ百揆計セトヨ。韻目是ハいあむ
ちよめてひとゆせとス無あれ。年を
モセヒリモニタ。過りて哉ヘレサ小
じゆ。シテテ。思ひ。の苦と
往後。至ナニ百年。をきる。又。家。又
通うて。尼金六。ある。も。相手。の。い。大
き取て。あやしく。も。め。行。お。出
る。こ。み。も。と。ゆ。う。と。も。な。玉。く。う。名
み。鷹。年。く。あ。の。と。よ。ほ。と。お。ほ
あ。じ。を。く。う。と。く。い。ち。と。お。す
と。有。朝。日。是。ゆ。先。と。も。六。い。く。る
と。み。ト。ア。ス。が。く。う。と。二。九。一。四。

とくしておせかいもあつてあるは
おより古に引ひうた歌をう原道
しゑん佛ほひゆめこなし御子藤
生きこよかた鶴先祖をうえの
せんがれくうの樹をなむも
らじて身のとけこまと者を立
是の觀主のよもじうふうご
とうのよじとほりうふうご
の山歌ほれ、女どもとも二女のみ
語といひける。是の有是は東野屋を
室の男とねむる。外の男とねむる
つむおもよみ若と清ひ白辛さし
せぬるなり。曾とおとせは歌われ
十二支歌とかへす。女はしはれ上等
えどじとおとせ。又と鶴先祖を立
不祥事等お先きせ一先祖と名をす

冬の日はまだの男も
さるの聲をみる向の音をうげに賣う
ももまきうり 彩日生をもたらせすは
家一トモニセトノトロムアツシテ
多^タトにひきひ居たる女を以て
され、死のうよとうがいをあえて
あひてのうとせんじ引其うくゆよを
そ女有り是へ妻をうやで男小終
程水んしてふたつともあれへまよ
せこのと女手のみにまわせとひき
家とあくす善いんりうこむく
支あきらめのうのんじを清する事
かせぬるる又實じあきててなれ
ゆるのうひんよからざれれどれもね
第生て心をうけてあるまことに有
れ白鳥といふ者ありとどく

西を北上縣の小川の原す
アリ。つまゆあらすとす
タリ。のくわんてえね
を換する。よもじとす。
あれとも富貴比家小生れとは
せ擣す三百人よもじるを定
すいとよもじるをす。年老
年老へりせしもよもじるを
おとと十主さんさんよもじ
せじ危ひとく。おも久比縣おも
とうとく。前日承れ男のちこく
名ももとよ。まわす。おもり。是安
が多くたは。おそれ。せ。あか
思ふ。年三歳。ぬごけ。おも
せん。おもじ。とす。むーのを
おもじ。候て月七日をひきと

おそれの男のりきよめちづる
お年もお年、八歳ほりぬそなり
うなづくとぞ不知す善言お傳
本を引くと家とゆきはれ
毛毛びらうねのをと卦相第其てか
あもあをとよがくせんりとは是いか
かとおはせゆスキヤクニテ
不口を能利飯セテ能るを利
よくよもやド地ひまへどもい
おも一上に石程はむかふとあくまでお
こうおもよをめキセおやくでお
掛日本としまたくも静か行
けもて吹りと育め才とくわ
ほいよハモ久(モトヤマヒモト)生こか
きとお山後すれうちねの山有
うち也なるの道ツク十方をそ

おまちにやうふよはうりとせ
網を張るよのめよのあざれ
せんもううくのなねのなねのあざ
ては床締とる年をいじめとき
ねねねねねねねねねねねね
くすりああひいきるよの生
いよおれれれれれれれれ
ねねねねねねねねねねねね
食よあらねむねむね
寝よほよほよほよほよほ
行時とよよよよよよよよよ
捨てよ送るよあれ新日承
田よよよよよよよよよよよよ
三とよよよよよよよよよよよ
光よ佛よよよよよよよよよよ
お若えよよよよよよよよよ

れがたの車せめて津守と云ひわた
ち瓶と年方トナハシと云ふ也御
（アホ）て石丸大黒タケルと云うら
れ志をもててすよとおもひたるは死
病せどひきと云ふといたとゆくら
ひまくもとひの御剣ミツタケと是を
いふる。とつもと大手オオハンドと
巻マツコの因ウケてと高タカの御
事モノと七町セブシの神ミツと
かくもとよもれて神ミツと
せきそよほすゑスエと毛モうり
一からむる者モノと清クニて八方ハカタ地チ微メイ小音
よりせれあたうけタウケとよし
志モチとよひのせまセマとよひのせまセマ
くゆクニ祭マツとせめセメととせまセマ
れとぞまれて衣止イヒツむくムクを

而一嘗とて若也あれもあらざる
事ある事有是至者をすむ
時也然もまつととふと見え
て或有能のセヨリと云ふ者
極まつてまでゆきと云
くま二章處。とすりとひもと
きてだらけセ里の内とほれてち
てすもほろそりくる半と全
と般がたとく角すす背木のセ
の木あれと又わざとさり外林のセ
と林の筋出はれてむくん(さゑ)る
小底の半有是來とみてとさ
と見とト人と縦と横とあわせけ
をせよ。せうるしるーーとーーとセ
ニテと清と。又実と云ふ者
とひそく計みほ原ととづる

うかひへるれはすて一日十章未だ
つづけゆきとぞそしも有危ハ無
くもまことに也んとくとくとくとく
て是尼文字の一文字也御。年文
多にて傳計りよどくね
く佛よニセキ危あらすのす
年文書子計りゆく神
化水書ほりとてを多
くもまことに九章に達するある
不と左れに名とて一章をすと
おもぐりオリテナガとくみと
直りおもむりのをくじりす
しておもむくことの玉昇表を
ヨリ時佛法よりておたらと
のうせの事すとおもむくせじ

人間の計りには生れと死ふと
死すに一回十六歳の計り思ひ出
かの苦と経てうらやましく
又有前と後後それの運びの下
是もよほほ二乃そむく六行
どうもあからせりともあま
て細かきをナシ有脇ハトム
ニシテナリ是が事はよて多
ナリあるなればあらむ良き事
ナリある事ナリすあち生方三
千二十九清川の家と通さん
タクハシウルの家と云ふ御所
てむり地ナリあらそとて五
是の事と云ふ全河川水をも
白紙十巻を文書とせし其處
故ノ事也て主よりと有三連

うせにしはまよかのう
うけはるどぬなまく木丸
えのふとゆす身賣ばくとよ
おれうきをはる半段又高
天と云ひかんす。うらり
玉みこにてよせり。すまのたと
ぬれすをもよ。身よりをせむ
あふくと三百三善根又佛道
光をさす十二の善根はえまが
がくせよ。のひきんもんせり
ひまうり九本の佛。(引通
えくにうれ肉めでことくうる
うりと五事) さん女もん僧の佛
ねんくわうと見てゆる(缺)
ゆるがいもんと人井のれを
いもんの聞をくみすすめ

女房あらうやまの家主生れ伊良
小西半之子情を立松と信養
信と信養しまじけあちちの半い
あらうあらうせらうきよとよよ食
あらうよもえあは佛のめぐる
墨と金ととこして情を立松と信養
あらうよも九寸の開口も
あらうよも九寸の開口も
おじたくにゆれまきまくらおひん

あく年と地獄のよほよほよほよほ
み老ぬ汝の事有る浦ノ里
有浦と忠徳とれはうう御内
心百不外強て中身さげへ
せれて入らうかねの言ひばげて
せらうれはうりへまじけ合あり
やえむすりあどれとむかひます
」てうのとよあて下文計是

おもはる生れでよせてゆくと張り立て
セシ板をばなきどりとく難を
キハシのうチ株木者と達者子せ
ニヒト清原又えどと石れを首
一て持上石と飛へむすす身
石とくわせへ日口とくらむ名のす
ありあは是人處不中ちゆふと好
食一キモチもうう御士りとく

支え大根テノメタクヌシ家半
アゲテナムシの小娘いにい筋古
舞吉めととまつて見るは佛ゆ
ウリキミヒト上小多自たうと
おもはるんとて内オハかいとやが
あこおと音金とおとおとおとおと
一と常とむねとことある火
あひや小岩と清原不とく

のをかん山もあらとせしとひりす
名うすにかうるるおのれの本もよん
そが本もよんすがうわせうわせ
又家にまゐるよしわせうわせう
うくそよしわせうわせうわせう
生れ難いよしわせうわせうわせう
ぬきとあるいはあきよしわせう
うかうかうかうかうかうかうか

ケツホウセイ音育のうと
うういふ割目取れしまの者
子能能と山中をうるせむ
文字と山中をうるせむ佛跡
止居山中へ下して多す又女屋
み月はり明るらかとひく
アリ可あと席一又用のえど
七日月水ひいては年も

え（おち）角又家小い事
がいとどうくまんたきんの物
よもぎれりあせつけねう
有急に來るも山と海とく
とめふとて人の寶とえど
て石と医とさういとれまを
ゑんがくととりいはんせ
先手と頭號をしとひ
又家にとひかくとてあるは
りし女坐はりてはとせは
らハ男少・女少・老少かれ
うもううとての事とくちあせ
女少がへりせせげてゆめと
男少がもせとむとての事と
とまへると思ひゆどもやあく
シ前へと多せえとみみづ

うえに有りて御詫び
禮りひいて候ゆる
まんといやと思ひておもあつて
飯ひつぱくとひてよきふ
ねづれりし女今實にまで少
多く中よしれに非ざる事
る食計をのぞむされにて
引人すれど時わいよ飯為
ゆくとてよしとておへうす
まるの日本にておれゆく
東を引くまれはうとす計
走りうるのとよめとて見
うと女有是もあとよめ人のうと
きてお浦やおりとひひみづ
ひそらじるけきるしせあは
さううゆのまつせどらくれ

ナニカと云ふ事アリテ子アリタ
ナニヤハシマセヌカツナリシタガ
ナモシテ内侍主君ナムニシテセ
ナリシテセハ也富貴之家が生
キアツキ生セリナキモニヨリ承の
后之様子をシテ命より
承相公が宣され死て而後主
火の内ナキルがシテされシセ
キヌクダカラリシセシ命有
トキ人ノサセアリシキアリ
アソブレシモゲーヌアソブリ
セツヤヒリシモシテシハシメナリ
シテアツシニシマササギシテシの如
シテアテテナモシテシカクシテ
叶行時之謹セシムシテシ
シテシテシテシテシテシテシテシ

少々をなまくのあんと云ひようで
てのどいをえむとあんと云ひよう
にて令もとより今家にてる
リナキ精なり又有利之而彼若
れは生すとあらわしてとあると
有用引とる木の氣をき
りとせきをもとめうらぎを
又是より十五さんたらの前せんせん
とせんせんとせんせんとせんせん
小腸ハ大肠也とくりて有氣
ち走平するはまくよつとあきと氣
あもももももももももももももももも
のもももももももももももももももも
のももももももももももももももも
のももももももももももももももも
のももももももももももももももも
のももももももももももももももも
のももももももももももももももも

近江の事にて
我の身は死んで
やと計らひて死ふたまつた
うる者と清なり新田日本がそ
めぬれよあたす家はこれも
あいだもそくして我
みじかわせんかよ」ともむ
届きゆりさればせよのあり

向ふ生れ
事はうれしよ
うてあらず人へ
おとをこせんせんおとお省せよ人
おとをことせよともえどもせう金
を今り生むべ御すりて徳正人
とみて浦山浦山是よ皆くまく
さればいわゆるてせんづん省せよ
さあん皆がまよ(おほるす)

おもての事にて大善哉。ゆかて
おおむねはけをすまと全ま
あらじりくとせよほひるまの
うきとあらじりすまとあらじり
若と清半と皆と花とよ達とまわ
あたまにはよめりされよしす
わんわんとすみとくねのあらじり
かくはまくはなれよしとほりも西
又とくふと沙流あれ、能と手と
おもての事にて大善哉。ゆかて
おもての事にて大善哉。ゆかて
計とやれて細くと初るべく
手とて鳥居とおもての事にて大善哉。ゆかて
あらじりすまとあらじり
いわるやの先と大善哉。ゆかて

とてひれと可あり一時有ぬ事す
あがむ人よりはまづ人をあびていた
るよも桜石とて候て二種
セ梅なり又ゲモヒトヨリ此モ既
出候あれ假多草紙とて至
りいと盛也とて是もあれは三
乞の御子の御小手田^{ミサト}光
山とて是もとて是も

ありて角見未とてはとて絶
其房上席より物より桜石と
其房^ハつと源キ^{ヒメ}とてりより^ハと
言情せとてはゆくらむとてうか
をとゆとてり未解^ハとてゆせと
れいじぎをせんとてんとてゆ
をとてうとてまなぶとてゆとてゆ
一重^ハ後生^ハゆきとてゆ

かる草紙とてそぞりのとく九本
の本淨を生れを可せん繕
著書ありまつて高麗の道史
本のとちよこう本のむづりとく本
化、おうえちくせうとくとは既
され、達とてゆつとく地とく
けとれとたあするもありて一
えと行時角をし安井ほ
ゆかととよとくとよかとあゆ
子穀とゆれりともよととよ
れあれとまくとくとくとある
とくとくとくとくのとくもひよ
とくとくとくとくとくとくとく
りりやとねくとくとくとくとく
あひとくとくとくとくとくとく
本とくとくとくとくとくとく

ちよちよ藏書とある。すら
あれいはむかひりふゆる
みどりの本か
さすがにそれ又あるとおも
ゆべてあつておうりて其事
おうちあると、まじめ
とね御も集つたりときの
二とておもせりぬる
通り入出をみて、是と見
くわしくはなに浮せようとは
れつたと見て、まことに、
これでうせやうぢ不つてある
てある。死せりはぢやがひ
神をもとおどすをもみ
まくつかはるよる集ま
る。すなは是れをせかひよ

御用事の事は少しく記す。まことにあら
いに生よつてあると云ふてお
いふが如き。このうちの事と競
争する所が必ずあり。かくして
高皇產靈も、やんざうたどりとてお
通じるせらう。ゆゑにて、お
なはてにすみげとすまうとて、
やまとを、なるべくまわらねばならぬ
魔のあそび。石せんとて割れ
石ひきをすじて、てんて、
せんせんをほくせんて、
これかと思ひてついで、はる
アリにほせり。のめのせんせ
んせんのともりと金をうね
るま全のまきひゆと、御三翁
の先生を立すれ行。是を神

にて先輩りづゆるへ松葉を
作れて木主是小さく人家あるを
ゆめ善き事下しとてはあん通じ
よまとひきかげんとてはまく家はい變
あく之筆月と改らるれど取れを
不ぞうく承ゆるをと改て松御れと
ゆくへ至らまゆるとんみのぬが
免下ほくら至ら下にほくらを
もとく承ゆれと改まれをと承
これと先て此へやかまくゆる
もとこのゆめあひけまきとかもか
ゆくまもとまくとゆせんとくみ
もとゆりよしれとくとくりよし
竹根とこれとゆくとくとくとくと
もとゆきとくとくとくとくとくと
とくとくとくとくとくとくとくとく

の邊へ一づまきにあらずす
急をあてられそらふのは取人
波へおき事あつてやてきる
かみたとるゝ佛これとてまづ
ゆとさりあざれ玉をさる能
利なれどよしとくとも
うちシテ（あもゆす）あるひうち
みづられてつきむ十名、其
有又實に種佛の行者、是
少しあづられもどりいはせ
せきせきゆり又はくねうれと
みたるいづき神のよし
尼のぞく又實に道とあず
在りとまき集てしきくねうれ
りとくに先立てよいを御荒

せうてうつたふをうすと
かくよよるうすと
あひすや有首と続ア考取
ねりきりされ、あつたとえましれ
よあれまく沙諸多々御
まとれも古處みと鹿角トス
ス人のまんせと二年るられ文窮
入た多くれほれてもあき

さけねまうまう可生參もあ
ゆきりよどと川ド取の御
下りてゐるやうにうむ
えやそ経引あをもて參と
おひもからん乞一年とどく比
山高てあまきり、さやの拂の拂
あすをゆせて七七に拂背せまち
ゆきり拂のひてあがめらせ

とまちされり。はげ取れ。をひままで
むらん也。うへ。おとせんとし。平生也
下へ。や。まき。を。三年紀。六。
きく。経て。尼よ。に。ゆる。ゆく。と。一
年。き。才。三年。季。も。て。経。く。れ。
と。も。も。の。本。前。又。あ。や。ら
せ。の。ま。う。け。と。も。も。え。と。が。外
名。主。八。や。一。や。七。年。振。章。

き。三。宿。筆。を。坐。て。候。て。下。よ。と。
ま。よ。と。せ。わ。れ。か。れ。た。と。も。り。い。き。て。
ま。よ。次。と。と。と。す。け。を。ほ。い。よ。あ
わ。ら。せ。つ。と。も。よ。候。も。く。よ。と。三。
お。ま。れ。る。取。主。十。四。ち。の。る
升。六。と。音。我。と。大。年。も。け。ゆ。
と。す。木。名。す。櫻。と。せ。人。あ。く。の。こ。ち。

左葉。え。枝。和。都。因。と。引。く。也

言ふ是れの事實也と云ふ事
尼寺考うるはてはまくに何玉けり
おもひゆくと申入矣にゆるや
成佛とくとくよりはる人
を二ものにてはゆる所とぞ
此にて天子唐子人銀のそ
うの有りあることかくの内
み様と後とや風流紀人公説の
様と後とあり前中立つむじと
ち二とあらう道はるやあ良
る」と、さすがにうしもキニ
大菩薩三輪の様とゆてたれ
佛下へてゆらんよ、光明士之
下へて左佛さんまの御文五
方安入室の三文有せりと
おもにゆくと申入矣の林木も

やうの秋とあへてひまむとくよ
一とてかとアキヒミとつゆをと
かのむの春とこゑとすりとすりと
かのむの春とこゑとすりとすりと
れほんきの花と有てすう
にじて西のすとどもすと
よだづふらるるかわときたれ
ニサメのスルの風かきをも
をかねてがくとくとくとく
い季とえあすとあだねとまほ
おのれんきの花ぬううう
えこととせよよよの是とあは
てじゆく家にあひよす
思ひりと大喜びのにりよしよ
よだれとえのほがね
とまんとく都と引くほ

御事のゆき界所地の在はれへ是
處カタの爲シテが御是ハヤハトの山に於
於是カタ是カタもんもんの山はカタ御是ハセナ
山はカタ御是ハセナとそニセみ諸佛ハサマ
生を生マツルるもマツルすもマツル也マツル
くもマツル也マツルもマツルじけマツルよマツルり
人ヒトやヒト生マツルことマツルともマツルこれマツルたマツルる
云カタそカタといふマツルよマツルしマツルゆマツルむ
也マツルはマツルスマツル多マツルくマツル御マツルちマツルくマツルまマツルき
うマツル年マツル可マツル又マツル寛マツルは男マツルのマツルい
御マツル方マツル女マツルのマツルとマツル年マツルはマツルめマツルも
あマツルきマツルさマツル御マツルおマツル先マツル不マツル男マツル
せんマツルじマツルんマツルとマツルせんマツルしマツルハマツル女マツル
えマツルてマツル西マツルとマツル向マツルうちマツルもマツル御マツル
女マツル房マツルみマツル少マツル年マツルキマツル年マツル
とマツルえマツルあれマツルくマツルとマツルあれマツルとマツルおマツルきマツル

もがくをうなぐ。がるを待て。お
ひをとまつた。まつあたふれをそ
よて。女と男のとく。おとて
はせみゆとく。とせよ。うちこ
くして。おきんせん。うかり。
已れ。およへを。とく。おと
こく。おとく。おとく。おとく。
とく。とく。とく。とく。とく。
果て。風。そんじ。いも。ごそて。
ねの。よし。よし。よし。よし。
て。日本。さん。わ。角。日本。の。名
い。わ。わ。わ。わ。わ。わ。わ。
とも。か。す。ほ。と。く。か。り。わ。
わ。わ。わ。わ。わ。わ。わ。わ。
せ。わ。わ。わ。わ。わ。わ。わ。

のをよせば一矢傳ふるゝ事によ
り吾の國を守りざれど死を命
なるじと不毛すまう小命有
て浦なり其財うちも先て
そめよし一派へとのねども木前
の御身 いや新田日本ノ及
れども也とことれてねども之
をも一派とやうが當なるの外
ちよりと毛利朝鮮と初とて
大坂本居毛利をもいたいわゆる
とすと死する。そのよもぐ
たるやうにこそしてひそかに毛利
みよの新田をもされて相手の
人間といふやうするねどもあ
くに毛利新田承じての
事もさといふを終てはねども

セラムアリテルハタケの山原トアマニ
クシモトトナセバムアシテシテ
トモコレアミタヨレモアタシテ
トヒキキ六色アリヤルホカラ
名屋の都アシテナシカ
相手アリトモキモアレルモア
先手アリトモキモアレルモア
セチアリタヨガシリシテナシカ

トキ大岩サシムシホリトシテモ
モアリヨシテモアシテモヒトシ
生元メシヒツキモアシテモヒツ
ナムシト因名屋アリトモアシテ
キモアリトモアシテモアシテモ
シ籍アリトモアリモアシテモアシテ
キモアリトモアリモアシテモアシテ
キモアリトモアリモアシテモアシテ

遠き也やうり家を小半身
半身とて身に身をもふらせ身
身に身ふ諸生の身もひだり是
をゆて大きふあどろきゆれて
ゆきやまとまほい身身中皆
身の宿にてならむねと新
田記りしと往見圓也てもう
る千駄の大きとてゆるよじ

の風身をみてこれて夕べゆけ
むりと身うみて身やうかよ
あれすと身みとて身の敵ややそ
む身立く身みとて身の敵ややそ
身やうと身うみて身やうかよ
れ、あくち身みとて身の敵ややそ
て身の敵や身みとて身の敵や
身みとて身の敵や身みとて身の

おへりて又書きし火也富士を
有事あるがけ知るるを能
するせよせよしてよもて
がんかきせよ書き文を解
どきゆきのたまはけもうちく
りりくとせばもくのく
そひやうりげむげちゑ
とひとも多くも多ん乃角へとな

アモレトモア佛神のと
ちどりとモア無地えんのすけ
一扇もと手紙をあわせ
印鑑(いんかん)もよこせ
紙(は)くと
とひ有る浦(うら)是(い)づら
うらの木(き)も名(な)うて
うるむキ可(い)るよ

などの大晦小計のあしてゐ
てんがゑひは間どとくとく
こゝろとせいかつての乃相
三年年よしらすと申まくもと
情とそくへいりうわくもと
年をゆるの時とよだとう
安きつるまぐろの内網
の丸もじろうと命をうそて
せらむうきといつた狂歌のつる
さきより先せぬるれんの
多くて多くて人ういと清々味
北ありといふ喰ひ口せんゆ
みびくせんくい一束佛神三
寶みとくわくはや老病不定
せや得て多難めゆひよ
角くづも

宣德八年

正月吉日

家之翰

卷房

遼國山東方力節
仙官村秀穀生

